

2013 年度 ドクター研究員研究活動実績報告書

ふりがな 氏名	たじま あきひろ 田島 昭洋
(研究テーマ名) ウィーンの政治とシューベルト — オペラの検閲を中心に —	
(研究活動実績) <p>今年度のUCRCドクター研究員研究活動として、シューベルトとその社会をテーマにした博士論文でやや大枠に捉えていたシューベルトと政治の問題に取り組むことを計画した。</p> <p>博士論文（一昨年3月学位取得）において、19世紀前半のウィーン社会の状況として、貴族的反動体制と市民階級が対立し、しかも同時に市民階級内部にあって経済市民層と教養市民層が対立するという複雑な状況を明らかにしながら、とりわけ後者の対立における、シューベルトの教養市民層たる芸術家としての経済市民層に対するアンビヴァレントな関わり方を中心に考察を行い、シューベルトの音楽が当時の形成期にある市民社会の外的・内的状況を反映した、その意味で市民的な音楽であることを論証した。そして昨年度は、UCRCドクター研究員研究において、シューベルトとその創造的生活の基盤であった友人サークルとの関係を手がかりに、サークルが一見したところ華やかなウィーン市民サロン文化の様相を呈しつつも、その構成員（友人）の手になる詩に現実社会に対する批判や理想社会への憧憬が表され、それらの詩にシューベルトが積極的に作曲するなど、サークルが実際には社会の変革を訴えた政治的な組織でもあったことを明らかにした。</p> <p>本年度は、昨年度に研究した歌曲に現れたシューベルトの政治的姿勢をふまえつつ、さらに、シューベルトが取り上げた書籍なかでもオペラ台本とそれに向けられた検閲当局の姿勢を切り口として、政治とシューベルトの問題に検討を加えることができた。</p> <p>シューベルトの受容の歴史において最も認知度が低く研究の進んでいないジャンルは、オペラである。それは、彼自身が芸術家・作家としての社会的成功を期すべくこのジャンルに意欲的に取り組みつつも、ほとんど上演されなかったことに端を発している。音楽と社会の関係は、興行成績に依存する舞台作品では非常に厳しい。博士論文においてもこの問題に触れたが、シューベルト自身のオペラ作曲家としての資質への疑問や台本作家（友人）の作劇法の不十分さの可能性を列挙するにとどまり、台本が検閲によって上演を阻まれた問題については検討課題となっていた。政治がシューベルトのオペラに介入したことは4回あり、うち最初の3作品については、「不穏当」な題名の変更や「不適切」な文章の削除によって台本の審査をパスしたが、最後の1作品については、テーマが政治的であるとして上演の全面禁止の処分を受けた。だが不可解なことに、シューベルト自身が検閲当局の厳しい姿勢を十分認識していたにもかかわらず、本オペラの作曲を完成直前まで続行した。この点に着目して研究を進めるうち、（当台本の作家でもある）友人との友情を含めて、法に対する故意の挑戦的態度というこれまでの評伝や研究で見過ごされてきたシューベルトの側面と彼と都市ウィーンとの関係を指摘することができた。</p> <p>本研究活動の成果は、来たる3月31日に開催される大阪市立大学ドイツ文学会第51回研究発表会において、UCRC研究テーマに沿った「政治とシューベルト — 書籍の検閲を中心として —」の題目で報告することになっている。</p>	